

# 達成可能な目標提示がもたらす効果： 英語学習に対する好感の視点から

## Effects of Setting Attainable Goals for English Language Learners from Different Courses with Positive or Negative Experiences

岡田靖子 澤海崇文<sup>a</sup> いとうたけひこ<sup>b</sup>

OKADA Yasuko, SAWAUMI Takafumi, ITO Takehiko

**要旨：**学習者にとって到達目標を設定することは重要であり、効果的な学習を実現する。本研究は、英語学習者の言語上達をモデルとして示すことによる動機づけを検証するものである。本研究の目的を達成するため、英語学習者によるスピーチのビデオ映像とTOEICスコアの変化を示したスライドの2種類の教育的道具を使用した。参加者はTOEIC準備コースあるいはスピーキングコースを履修している日本人女子短大生56名である。参加者による自由記述回答を英語学習経験の好感によって2群に分け、テキストマイニングおよび質的分析手法を用いて分析した結果、大きな相違は見られなかったが、その分析の結果は2種類の教育的道具の効果を裏付けるものであった。とりわけビデオ映像は、学生が将来的に達成可能である目標を示すこと、またTOEICスコアのスライドは、TOEIC受験の準備に取り組みながら学習者の動機づけを高めることが示唆された。本研究の結果から、可視的に学習者が達成可能である目標を設定し、そのための課題に前向きに取り組ませることの重要性が再確認された。

**キーワード：**ビデオ映像、日本人英語学習者、テキストマイニング、質的分析

**Abstract:** Setting achievable goals for students makes learning more effective. Our study aims to examine how English language learners can be motivated by showing them the

---

a 流通経済大学

b 和光大学

improvements in the abilities of their peers. Two tools were used for this purpose: video clips of the improvement in peer performance and a visual demonstration of the changes in the TOEIC scores. The participants of the study were 56 Japanese college students who were either enrolled in the TOEIC preparation courses or the English-speaking courses. The responses of the participants to open-ended questions, according to their English learning experiences, were analyzed qualitatively and by using text mining techniques. It was observed that the difference in motivation between the two groups, the first with positive learning experiences and the second with negative experiences, was not large. Further, the results endorsed the effectiveness of the tools used. In particular, the video clips enabled learners to realize their scope for possible skill improvement, and the visual demonstration motivated them to prepare for the TOEIC tests. These results reconfirm that it is essential to set achievable goals in a visible manner to keep learners motivated to perform tasks to the best of their abilities.

**Keywords** : video clips, Japanese EFL learners, text mining, qualitative analysis

## 1. はじめに

外国語教育研究における学習者の動機づけの解明は、効果的な外国語学習を促進させる要因のひとつである。日本人学習者の場合、小学校における外国語活動や中学校・高等学校での英語学習を振り返ると、6年間以上にわたって英語の勉強に取り組んでいるものの、その学習の成果が期待されたように発揮できない学習者も少なくない。

学習者の英語力を測定する方法の一つとして、国内ではしばしばTOEIC(Test of English for International Communication) が用いられている。World Wide Report 2017(Educational Testing Service, 2018)によると、日本におけるTOEIC公開テストの受験者の平均スコアは517点であり、同じアジアに位置する韓国(676点)や中国(600点)と比べると大きく下回っている。公開テスト以外に、TOEICでは団体特別受験制度(Institutional Program、以下IPテスト)が設けられており、実施団体ごとにTOEICを実施できるように配慮されている。

国際ビジネスコミュニケーション協会(2018)によると、2017年度の全体受験者の半数以上はIPテストの受験者であった(1,289,311人)。IPテストの平均スコアは467点(企業・団体では

493点、学校では443点）である一方、公開テストの平均スコアは582点であり、IPテストと比較すると100点以上もの差がみられる。TOEIC受験者のデータに基づくと、日本人英語学習者の英語力は、リスニングとリーディングに限定した場合、他のアジア諸国より低く、とくにIPテストによる受験者の平均点は公開テストの受験者より低いことが明らかである。

日本人の英語力不足が指摘されているために、文部科学省（2015）は中学校・高等学校において英語力を向上させ、スピーキングとライティングのような発信能力を身に付けさせる必要性があると説いている。例えば、スピーキングには発表や対話などが含まれる。筆者らは、発表形式の一つであるスピーチ力を育成するために、日本人英語学習者によるスピーチのビデオ映像を活用し、その教育的効果を検証した。その結果、英語学習者をモデルとしたビデオを学習者が視聴することで、スピーチに対する練習意欲を高めたり、自身のパフォーマンスを調整したりする効果が示唆された（Okada, Sawaumi, & Ito, 2017, 2018a, 2018b）。このように、英語学習者のビデオ映像をモデルとして授業で活用することが、英語力があまり高くない学習者にとっても大きな励ましとなり、教育的効果を生み出すのではないかと考えている。そこで本研究では、英語学習者によるビデオ映像やTOEICスコアの推移を学習者に提示することは、英語の授業に対する動機づけを高めることを検証する。

## 2. 先行研究

### 2.1 動機づけ

外国語教育の分野において、過去10年以上にわたり学習者の動機づけ研究に注目が集まるようになり、多くの研究者が言語学習の心理的側面への理解に関心を示すようになった（Dornyei & Ryan, 2015）。動機づけは、特定の目標を達成するために個人が行動するよう自信をもたせる過程のことであり、それは言語学習を成功させるためにも不可欠である。動機づけには内発的動機づけ（intrinsic motivation）と外発的動機づけ（extrinsic motivation）の2種類があげられる。外国語学習の場面において、前者は学習者の外国文化に対する興味や外国人とのコミュニケーションへの意欲などの学習者の内面から発生する一方、後者はテストで高い得点を取ることなどの評価や報酬から生じるといえる。学習者の動機づけを持続させるには、外発的要因より内発的要因を追求するほうが効果的であるとの指摘もある。なぜなら、テストで高得点を取るというように、学習者の目的がいったん達成されると、学習者の動機づけが弱くなるからである（Deci,

1975)。

行動に対する動機づけを高めるためには、目標設定が重要な役割を果たす。Locke, Shaw, Saari & Latham(1981)の定義によると、目標とは「例えば、特定の標準能力を得るためあるいは決められた期限内における行動の目的」である。学業や組織などの場面では、個人の課題遂行能力を向上させるために目標設定が用いられる。達成されなければならない目標は難しすぎず、易しすぎないものがふさわしいとされている。頑張るだけの目標 (do-your-best goals) を設定するより具体的で明確な目標であるほうが高い課題遂行をもたらすことが示されている (Locke & Latham, 2002)。先行研究の結果から、与えられた課題が遂行できる範囲のものであるならば、期間を設けて難しい目標を設定することは効果的な戦略である可能性もある。とりわけ、外国語の習得は長期的な目標を必要とすることから、短期的な目標を設定することで学習者の自己効力感を向上させながら強い動機づけに結びつくことが考えられる (Dornyei, 1994, 1998)。

## 2.2 英語学習に対する意識

学習者が英語学習に対して肯定的な意識を持つこと、つまり英語が好きであることは、英語学習を成功させる要因のひとつである。しかしながら、本来、中学校の段階で身につけているはずの知識が欠如したまま大学生になってしまった学習者が増加していることをふまえ (酒井他、2010)、昨今では習熟度の低い学習者を対象としたリメディアル教育に関する研究が実施されている。例えば、牧野・平野 (2010) は、日本人大学生229名を対象とした質問紙調査を実施し、英語学習に対する意識や姿勢について検討した。その結果、学生の学習意欲を高めることが、英語学習に対する意識を高め、結果として授業で積極的に学びたいと考えるようになると示唆している。

また、英語に苦手意識を持っている大学生48名を対象として携帯電話の動画撮影でスピーチ映像を撮影し、振り返りを取り入れた授業の効果を検証した研究 (牧野、2014) では、自己のパフォーマンスのモニタリングが可能となり、学習者の気づきを促すことが示された。さらに筆者らの研究 (Okada, Sawaumi & Ito, 2017, 2018a, 2018b) では、英語学習者によるスピーチ映像をモデルとして活用し、その教育的効果を検証したところ、モデルの視聴は英語習熟度の高低にかかわらず、英語学習に対する意識を高めるのに効果的であることが示唆された。

英語の授業でスピーチを指導する場合、スピーチ映像の視聴は学習者に肯定的な影響を与える可能性が示されているが、たとえばTOEICなどの英語試験のための指導を実施している場合、学習者にスピーチ映像を視聴させることは効果があるだろうか。逆に、TOEICスコアの向上を

目指している学習者に対して動機づけを強化するような指導方法が、スピーチ力の向上を目指している学習者にとって効果的であるかはまだ明らかにされていない。そこで本研究では、学習者の中学・高校における学習経験のあり方を考慮するとともに、スピーキングやTOEIC準備クラスを受講している学習者にとって効果的だと考えられる手段を用い、学習者の動機づけに与える教育的効果を検討する。

### 3. 研究方法

#### 3.1 目的

本研究では、スピーキングやTOEIC準備のための授業における教育的効果の提示によって、学習者の英語学習に対する動機づけが高まることを明らかにする。第一に、日本人英語学習者のスピーチ映像を到達すべき目標として示し、学習者の英語スピーチに対する関心を高めることを確認する。第二に、日本人英語学習者のTOEICスコアがどのように変化したかを理解し、自らのTOEIC受験に対する動機づけを高める効果を質的およびテキストマイニングを用いて検証する。

#### 3.2 調査対象者

埼玉県内の女子短期大学で「TOEIC400」の2クラスからそれぞれ19名と15名、「ビジネスイングリッシュ」の12名、「英語コミュニケーション」の10名の計56名が本研究に参加した。参加者のほとんどは国際コミュニケーション学科の1年生であり、英語コミュニケーションのクラスには科目履修生が1名含まれていた。4つのクラスは第一筆者が授業を担当していた。学生は選択必修科目として上記のクラスを履修していた。1コマ分の授業は80分で、1学期は15週間であった。

TOEIC400(以下、TOEICクラス)は週2回の授業であった。英語プレイスメントテストによってクラス分けが実施されており、学生はTOEICテストにおいて400点取得を目指していた。ビジネスイングリッシュと英語コミュニケーション(以下、スピーキングクラス)は週1回の授業であり、TOEICクラスとは異なり、プレイスメントテストによるクラス分けは行われていなかった。したがって、各クラスにおける学生の英語力には個人差が見られた。ビジネスイングリッシュでは2人以上の学生が短い会話を演じるスキットが2回、英語コミュニケーションでは

スピーチが3回予定されていた。

### 3.3 研究手順

本研究は、2018年度春学期の第2回目の授業中に実施された。学生の回答が研究および教育目的のために使用されることや、本研究への参加が学生の成績に影響を与えないこと、回答の記入は匿名で実施されるため個人が特定されることはないことを質問紙に明記した。データ収集は、図1のように実施された。

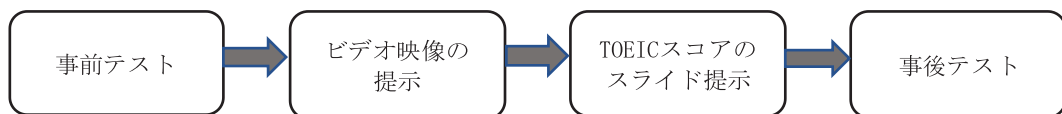


図1 データ収集の手順

まず事前テストでは、学生の学習経験や学習ストラテジー、外国語学習に対する信念についての測定を実施。次に、日本人英語学習者2名によるスピーチ発表のビデオ映像が学生に提示され、ビデオ映像を視ている間、事前に配られた用紙にコメントを自由に記入してもらった。コメント記入後、クラスでビデオについての感想や意見を述べてもらった。

続いて、TOEICテスト2回分のスコアの変化を示したスライドを示した。そのスライドを見て、どのように感じたかを配布された用紙に記入してもらった後、クラスで意見や感想を述べてもらった。最後に事後テストが実施され、学生の外国語学習に対するビリーフがどのように変化したかを測定した。事前テスト開始から事後テスト終了までの所要時間は約50分であった。

#### 3.3.1 ビデオ映像

使用されたビデオは、第一筆者が2017年度春学期および秋学期に担当した授業で撮影されたスピーチ発表であった。ビデオ映像を授業以外で使用するにあたり、学生から同意を求めると、教育目的での使用に同意した学生は5名であった。ビデオの選定にあたり、海外での居住経験のある者や日常的に英語を使用する環境にある者、科目履修生として受講している者を除いた結果、2名の学生によるビデオ映像を使用することとした。学期ごとにスピーチが2回実施されており、本研究では、2017年度春学期の1回目と秋学期の2回目の映像が参加者に提示された。スピーチのトピックは、1回目が「高校時代の思い出」と2回目が「尊敬する日本人」で、各スピーチ

の長さは180-200単語であった。スピーチ映像を使用した目的は、スピーキングクラスを履修している学生のスピーチやスキットなどの発表に対する動機づけを高めることであった。また、TOEICクラスを履修している学生にとって、日本人学習者による英語スピーチを観察することは貴重な学びの機会になると考えられた。

### 3.3.2 スライド

TOEICクラスでの学習経験が、学生のテストのスコアに影響を及ぼす可能性があることを理解させるために、以前に同クラスを受講していた学生のスコアをパワーポイントを使って示した（付録1）。提示されたスコアは、以前に第一筆者が担当していたTOEIC500(500点をを目指すクラス)の学生(14名)が受験したTOEIC IPテストの結果であった。1回目は6月、2回目は12月に実施された。

テストの平均点は1回目329.3点、2回目364.3点であった。スコアが上がった学生9名のうち、100点以上上がった学生が2名いた。そのうちの1名は145点(285点から430点)、もう1名は130点(305点から435点)伸びていた。一方で、スコアが減少した学生も5名いた。なかでも、1回目に高いスコアを得ていた学生などは、2回目のテストではスコアが上昇しなかった。

### 3.3.3 質問紙

学生の英語学習に対する動機づけを高めるためにビデオ映像とスライドを活用し、その教育的効果を測定するため質問紙が作成された(付録2)。事前テストには100番台と200番台の項目の合計28項目、事後テストには200番台と300番台の項目の合計24項目が使用された。

事前テストは学習者の中学・高校における英語学習の好感(101-106)と学習ストラテジー(107-110)、英語授業に対する期待度(201-218)に関する項目から構成されていた。100番台の項目では、107は久保(1997)、108-110は山口(2012)を参考にした。200番台の項目は、207、209-210、216-218は山口(2012)を参考にした。また、208、213-214は山口(2012)を用いた。上記以外の100および200番台の項目については独自に作成した。

一方、事後テストでは事前テストで使用された英語授業に対する期待度に関する項目(201-218)を再度使用し、ビデオとスライド視聴後の変化が測定できるようにした。加えて、ビデオやスライドの視聴による効果(301-306)を確認するための項目が独自に作成した。全ての項目への回答は「(1)全くそう思わない」から「(5)とてもそう思う」までの5件法で求めた。

質問紙には自由記述欄が設けられており、ビデオ映像とスライドのそれぞれについて感じたこ

とや考えたことを自由に記入してもらった。

### 3. 4 分析方法

まず、中学・高校における英語学習の好感高・好感低（101-106）の6項目から構成される合計値に基づいて2群を作成した。これらの項目の $\alpha$ 係数は.827であった。各項目は5件法であることから、平均値が3以下の回答者27名は「英語学習好感高群」、平均値が4以上の回答者29名は「英語学習好感低群」とした。

次に、中学・高校における英語学習の好感高・好感低ごとに、学習者ビデオ映像とスライドに関する自由記述回答の特徴を検討した。事後テストで収集された学生による自由記述回答を可視化するため、テキストマイニングソフトウェアText Mining Studio（株式会社NTTデータ数理システム）を用いた。テキストマイニングは自由記述回答などの質的なデータを量的に分析する手法の一つであり、単語頻度分析や特徴語分析、共起語分析などが可能である（服部、2010）。本研究では、主に単語頻度分析、特徴語分析を実施した。

なお、事前テストおよび事後テストで学生が回答した統計的データの分析結果および考察に関しては、別稿（Okada, Sawaumi & Ito, in press）で報告する。

## 4. 結果

研究参加者が記入したスピーチ発表のビデオおよびTOEICスコアのスライドに対するコメントをテキストデータとし、その基本統計量を表1に示す。参加者の合計が56名であり、自由記述回答の質問がビデオ映像に関するコメントとTOEICスコアに関するコメントの2種類に分けられていたことから、1つの質問に対するコメントのまとまりが終了するまでが1行となっている。その結果112行のコメントのまとまりが見られたことになる。平均行長（文字数）は92.1文字であり、1つのコメントの平均文字数を示している。テキスト全体における延べ単語数は2156であり、単語種別数は631であった。1文における平均文字数は38.2であった。



表1 テキスト全体の基本統計量

項目	値
総行数	112
平均行長（文字数）	92.1
総文数	270
平均文長（文字数）	38.2
延べ語数	2156
異なり語数	631

#### 4.1 単語頻度分析結果

ビデオ映像に関する自由回答記述で使用された単語について、名詞・動詞・形容詞上位15件を表2に示す。

表2 ビデオ映像に関するコメントの単語頻度上位15件

単語	品詞	好感高群	好感低群	全体頻度
思う	動詞	26	36	62
英語	名詞	17	17	34
2回目	名詞	11	12	23
スピーチ	名詞	8	13	21
感じる	動詞	9	12	21
話す	動詞	13	7	20
1回目	名詞	8	10	18
自信	名詞	7	9	16
見る	動詞	9	5	14
自分	名詞	6	8	14
良い	形容詞	7	7	14
授業	名詞	3	10	13
人	名詞	7	6	13
話す+できる	動詞	6	6	12
声	名詞	5	6	11

まず名詞に着目すると、「英語」「スピーチ」「2回目」「1回目」が上位に位置していることがわかる。続いて「自信」「自分」「人」といった対人関係を表す語も上位15位件内にみられていた。次に動詞に着目すると、「思う」が頻度として圧倒的に多いが、「感じる」「見る」などもあり、「話す」「話す+できる」といった単語も出現していた。形容詞については、「良い」が上位にみられ、形容詞には使用頻度が高い単語があまり含まれていないことがわかる。

表3 TOEICスライドに関するコメントの単語頻度上位15件

単語	品詞	好感高群	好感低群	全体頻度
人	名詞	28	32	60
思う	動詞	28	26	54
点数	名詞	25	19	44
下がる	動詞	11	15	26
自分	名詞	17	9	26
上がる	動詞	10	12	22
勉強	名詞	10	8	18
頑張る	動詞	9	8	17
良い	形容詞	10	6	16
TOEIC	名詞	6	9	15
授業	名詞	5	10	15
高い	形容詞	6	8	14
いる	動詞	7	6	13
英語	名詞	2	11	13
スコア	名詞	8	4	12

表3は、TOEICスライドに関する自由記述回答に出現した単語について、ビデオ映像と同様に名詞・動詞・形容詞上位15件に着目した。まず名詞に着目すると、「人」「点数」「自分」「勉強」「TOEIC」「授業」「英語」といった単語が上位15件にみられていた。とくに「授業」「英語」については好感高群より好感低群のほうが多く使用していたことがわかる。英語テストに関連する「点数」「TOEIC」「スコア」といった語も出現していた。動詞に着目すると、「思う」が圧倒的に多く、続いて「下がる」「上がる」といった得点に関連した語も上位にあげられていた。形容詞については、「良い」「高い」というような評価を示す語が上位にみられている。

表4 好感高群の特徴語

単語	品詞	属性頻度	全体頻度	$\chi^2$ 値
頑張る+したい	動詞	4	4	0.93
緊張	名詞	4	4	0.93
わかる	動詞	3	3	0.87
勉強	名詞	3	3	0.87
発音	名詞	6	8	0.84

表5 好感低群の特徴語

単語	品詞	属性頻度	全体頻度	$\chi^2$ 値
授業	名詞	9	11	0.97
学ぶ	動詞	3	3	0.88
頑張る	動詞	3	3	0.88
発表	名詞	3	3	0.88
思う	動詞	22	38	0.84

#### 4.2 特徴語分析結果

表4と5では、ビデオ映像に対する自由記述回答を英語学習に対する好感別に特徴的な名詞・動詞・形容詞の上位5件を示した。属性頻度は好感高群あるいは好感低群のみに出現した頻度、全体頻度は両群に出現した頻度を示す。好感高群で特徴的に出現した語では、動詞の「頑張る+したい」「わかる」と、名詞の「緊張」「勉強」「発音」であった。以下のコメントから、1回目と2回目のビデオ映像の比較による自分の変化に対する期待や発表者への憧れが示されている。

- ・勉強したら人は変われるということを改めて感じました。自分なりに勉強して工夫して、before、Afterであんなに差をつけられるんだとわかりました。自分も頑張りたい。  
(TOEIC400-2受講生、好感高群)
- ・最初は目線がキョロキョロしていたり、手が動いていたり緊張していることが伝わってきました。ですが最後はしっかりとまとまっていてカッコよかったです。(英語コミュニケーション受講生、好感高群)

好感低群では動詞の「学ぶ」「頑張る」「思う」や名詞の「授業」「発表」といった語が特徴語として抽出されている。フィッシャーの直接確率検定 (Fisher's exact test) を実施したところ、

名詞の「授業」は有意に特徴的で出現していることが示された。また、全体的にビデオ映像に対するネガティブなコメントは見られず、発表者の1回目と2回目の比較、あるいは発表者と学生自身についての比較が述べられていた。

- ・ どちらの先輩も、1回目は表情が暗かったり、声のトーンが低かったのに対し、2回目は表情も明るくなり、声のトーンも良くなっていた。授業を受け、さらに自信がついた結果なのではないかと思いました。(TOEIC400-1受講生、好感低群)
- ・ 長い時間英語でスピーチするなんて今の私じゃ絶対無理と思っていたけど、授業を受けていれば自然に身につけて、最後の授業では自信を持ってスピーチができるのかなと思いました。(TOEIC400-1受講生、好感低群)

表6 好感高群の特徴語

単語	品詞	属性頻度	全体頻度	$\chi^2$ 値
やる	動詞	6	6	0.99
頑張る+したい	動詞	6	7	0.94
必要	名詞	4	4	0.94
変わる	動詞	4	4	0.94
モチベーション	名詞	3	3	0.88

表7 好感低群の特徴語

単語	品詞	属性頻度	全体頻度	$\chi^2$ 値
苦手	名詞	5	5	0.97
英語	名詞	8	10	0.94
多い	形容詞	4	4	0.94
言う	動詞	3	3	0.87
授業以外	名詞	3	3	0.87

表6と7は、TOEICスコアのスライドに対する自由記述回答を好感別に特徴的な名詞・動詞・形容詞の上位5件を示している。好感高群で特徴的に出現した動詞は願望や要望を示す「やる」「頑張る+したい」「変わる」、名詞は「必要」「モチベーション」といった語であった。なかでも、「やる」という語は有意に特徴的に出現していることが示された。

- ・やる人とやらない人の差がすごそうだし、上がるように努力したいと思った。（TOEIC- 1 受講生、好感高群）
- ・プラスアルファすることだけで、やるかやらないかだけで、気持ちだけでこんなにも、かわってくるんだとわかった。（ビジネスイングリッシュ受講生、好感高群）

一方、好感低群で特徴的な語は名詞の「苦手」「英語」「授業以外」、動詞の「言う」、形容詞の「多い」であった。なかでも「苦手」という語は有意に特徴的な語として抽出された。英語に対する苦手意識を克服したいという意味が、以下のコメントから推測できる。

- ・スコア変化を見たことで、「ここで学べば今度こそ苦手を克服し、英語が好きになれるのではないか」と思えてきて、少し、英語を学ぶ事に前向きになりました。（TOEIC- 1 受講生、好感低群）
- ・私は英語が苦手なのでTOEICスコアの変化を見て私でも英語ができるようになるのかなと期待の気持ちが高くなりました。（ビジネスイングリッシュ受講生、好感低群）
- ・自分は英語が苦手ですが、半年間でこんなにも点数を伸ばすことができるのなら、空き時間や家でも一生懸命勉強したいと思った。（英語コミュニケーション受講生、好感低群）

## 5. 考察

英語スピーチのビデオ映像やTOEICスコアのスライドを用いて、学習者の英語学習に対する動機づけが高まることを、英語学習に対する好感別に検証した。まず、表2の単語頻度分析の結果から、授業における学習の効果をビデオを使って学習者が可視的に確認することは、好感高群だけでなく好感低群にとっても効果的であることが示唆される。なかでも「自分」「人」というような対人関係を示す語が使用されていることから、自分と発表者、あるいは2人の発表者の発表能力を比較し、学習者個人の基準を用いた評価が行われていると考えられる。

このようにビデオ映像を活用することは、個人における異なる2点における行動を比べる継時的比較<sup>1</sup>や、自分と他者の行動を比較する社会的比較<sup>2</sup>が可能となり、これらの比較をすることで学習者が英語学習について、これまで失ってきた自信を取り戻している可能性が考えられる。英語授業における学習者のビデオ映像をスピーチのモデルとして使用した研究（Okada et al.

2014) では、学習者とモデルの英語力の差が大きい場合、学習者のスピーチに対する動機づけが低くなることが示された。本研究ではビデオの視聴によって学習者に向上性の圧力<sup>3</sup>が加わった結果、学習者はビデオ映像に対して前向きに捉えることができたと考えられる。

ビデオ映像の評価は主観的な判断に委ねられることから、学習者によっては「ビデオ映像の発表者を比較したが、あまり変化が見られない」との記述も見られた。しかしながら、先行研究(岡田、2016)で提案されているように、本研究の結果は、ビデオ映像の活用が学習者の英語学習に対する肯定的な態度を引き出す可能性を示唆した。

表4と5に示された特徴語分析の結果から、好感低群において「授業」が有意に出現していたことから、この群に対して授業の重要性を意識させるきっかけを与えたのではないかと推測される。中学・高校での英語授業を楽しんでいると感じてこなかった学習者にとって、短大で再び英語の授業を受けなければならないことは苦痛なことである。しかし、実際の授業ではないが、授業の一場面である発表の様子をビデオ映像で確認することが、学習者の授業に対する期待を高める結果になったと考えられる。

TOEICスコアのスライドを用いた英語学習に対する動機づけに関して、好感高群と好感低群ともに、スコアの高低に学生の関心が集まっている。これは、TOEICテストが合否ではなく、得点で判断されるという特性から当然のことと言えるだろう。表6と7では好感高群の「やる」と好感低群の「苦手」が有意に使用されていた。好感高群の「やる」や「頑張る+したい」からみると英語学習に対する抽象的な考えや願望があげられる。一方、好感低群の「苦手」や「英語」から検討すると、学習者にとって英語学習とは、英語力向上という長期的な目標ではなく、授業という短期的な目標を達成するためのものだと考えられる。TOEICスコアのスライドの活用は、学習者の英語力も努力次第で向上するという希望を与えるかもしれない。

## 6. 結論

本稿では、学習者と同じ日本人英語学習者のビデオ映像やTOEICスコアのスライドを提示し、学習者の短大における英語授業に対する動機づけを高める検証を実施した。自由記述のテキストマイニングおよび質的分析の結果、両群の学習者の自由記述内容には大きな差は見られなかったが、ビデオ映像やスライドを活用すると、両群の学習者が英語学習に対する積極的な姿勢の確立につながることを示唆された。好感低群の学習者がビデオやスライドを通して授業の中でどのよ

うに変化できるかを事前に理解しておくことは重要だろう。本研究ではTOEICクラスとスピーキングクラスの学習者に対し、英語授業での学習に対する動機づけを高めることを目的としたが、他の授業においても授業のガイダンス等を利用して、このような動機づけをしておくことは重要であり、学習者が授業のなかで目指すべき目標を明確に知らせることは必要だろう。

本研究の結果から、英語学習への苦手意識を強く持っている学習者に対して、過去の学習者のスピーチビデオやTOEICスコアの変化を提示することは、英語授業だけでなく、英語学習そのものに対する興味を抱かせることも可能であることがわかった。昨今では、グローバル化された社会で活躍できる人材の育成が急務となっている。日本の高等教育機関でも、国内だけでなく海外でも自分の意見をはっきりと述べることができ、他者の文化を尊重できるような人材を輩出することが求められている。TOEICテストは、受験者のリスニングとリーディング能力を示す指標の一つに過ぎないが、その結果によっては動機づけを高めたり弱めたりする効果を持っていることも考えられる。本研究では一時的ではあるものの、学習者の英語授業に対する前向きな動機づけができたが、今後の課題として、英語への苦手意識が強い学習者に対する持続可能な動機づけを検証したい。

## 謝辞

本論文の執筆にあたり、木下恵美さんと阿部恵子には下読みをしていただきました。この場を借りてお礼申し上げます。

## 注

- 1 このように過去あるいは将来の自己と現在の自己との比較を継時的比較という。Albert(1977)を参照。
- 2 自分の能力などを他者とのそれと比較することを社会的比較という。Festinger(1954)を参照。
- 3 自分より能力の優れた他者との比較が行われた場合、自分が優位に立ちたいという傾向が生じる。この向上性の圧力と動機づけが連動することが示されている(Wheeler, 1966)。

## 参考文献

- Albert, S.(1977). Temporal comparison theory. *Psychological Review*, 84 (6), pp.485-503.
- Deci, E. L.(1975). *Intrinsic motivation*. New York, NY: Plenum Press.
- Dornyei, Z. & Ryan, S.(2015). *The Psychology of the Language Learner Revisited*. Routledge.
- Dornyei, Z.(1994). Motivation and motivating in the foreign language classroom. *The Modern Language Journal*, 78 (3), pp.273-284.
- Dornyei, Z.(1998). Motivation in second and foreign language learning. *Language Teaching*, 31 (3), pp.117-135.
- Educational Testing Service(2018). *2017 Report on Test Takers Worldwide*. Retrieved from <https://www.ets.org/s/toeic/pdf/2017-report-on-test-takers-worldwide.pdf>
- Festinger, L.(1954). A theory of social comparison processes. *Human Relations*, 7 (2), pp.117-140.
- 服部兼敏 (2010) 『テキストマイニングで広がる看護の世界』 ナカニシヤ出版
- 久保信子 (1997) 「大学生の英語学習動機尺度の作成とその検討」『教育心理学研究』45(4), pp.449-455.
- 国際ビジネスコミュニケーション協会 (2018). *TOEIC Program Data and Analysis 2018*. Retrieved from [https://www.iibc-global.org/library/default/toeic/official\\_data/pdf/DAA.pdf](https://www.iibc-global.org/library/default/toeic/official_data/pdf/DAA.pdf)
- Locke, E. A., & Latham, G. P.(2002). Building a practically useful theory of goal setting and task motivation. *American Psychologist*, 57 (9), pp.705-717.
- Locke, E. A., Shaw, K. N., Saari, L. M., & Latham, G. P.(1981). Goal setting and task performance: 1969-1980. *Psychological Bulletin*, 90 (1), pp.125-152.
- 文部科学省 (2015). 「生徒の英語力向上推進プラン」Retrieved from [www.mext.go.jp/en/news/topics/detail/\\_icsFiles/afieldfile/2016/10/19/1378469\\_001.pdf](http://www.mext.go.jp/en/news/topics/detail/_icsFiles/afieldfile/2016/10/19/1378469_001.pdf)
- 牧野真貴 (2014) 「リメディアル教育対象クラスにおける携帯電話動画撮影機能を利用したスピーチトレーニング実践報告」『Language Education & Technology』51, pp.297-318.
- 牧野真貴・平野順也 (2010) 「英語リメディアル教育を必要とする大学生を対象とした英語学習意識調査」『近畿大学教養・外国語教育センター紀要』6(1),pp.39-55.
- 岡田靖子 (2016) 「社会的・継時的比較から見たビデオ映像活用の提案」『言語教育研究』8, pp.33-46.
- Okada, Y, Sawaumi, T, & Ito, T.(2014). Different effects of sample performance observation between high and low proficiency English learners. In Aishah M. K., W. M. Chan, S. W. Chi, K. N. Chin, S. Klayklung, S. Kumar Bhatt, M. Nagami, J. W. Sew, T. Suthiwan, & I. Walker, (Comps.), Knowledge, Skills and Competencies in Foreign Language Education. *Proceedings*



of the 6th CLS International Conference (pp.394-413). Singapore: National University of Singapore, Centre for Language Studies.

Okada, Y., Sawaumi, T., & Ito, T.(2017). Effects of observing model video presentations on Japanese EFL Learners' oral performance. *Electronic Journal of Foreign Language Teaching*, 14 (2), pp.129-144. Retrieved from <http://e-flt.nus.edu.sg/v14n22017/okada.pdf>

Okada, Y., Sawaumi, T., & Ito, T.(2018a). How do speech model proficiency and viewing order affect Japanese EFL learners' speaking performances? *CALL-EJ*, 19 (2), pp.61-81. Retrieved from <http://callej.org/journal/19-2/Okada-Sawaumi-Ito2018.pdf>

Okada, Y., Sawaumi, T., & Ito, T.(2018b). A replication of Okada, Sawaumi, and Ito (2017): Effects of viewing speaker videos by proficiency order on Japanese EFL learners' speaking skills. *Electronic Journal of Foreign Language Teaching*, 15 (2), pp.388-404. Retrieved from <http://e-flt.nus.edu.sg/v15n22018/okada.pdf>

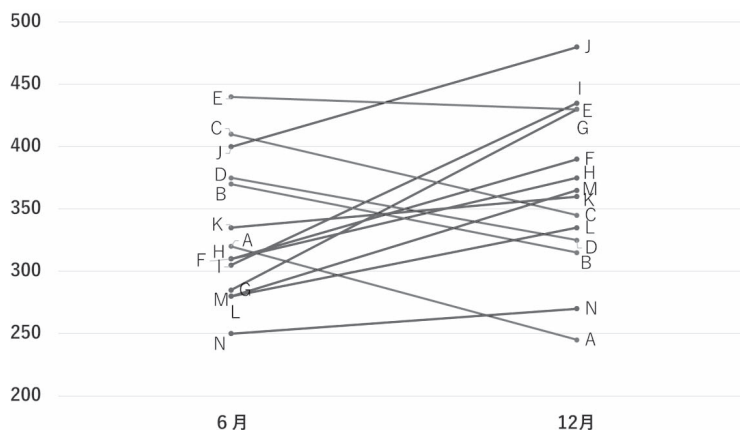
Okada, Y., Sawaumi, T., & Ito, T.(in press). Setting achievable goals to maintain motivation in Japanese learners of English as a foreign language. *CALL-EJ*.

酒井志延・中西千春・久村健・清田洋一・山内真理・間中和歌江・合田美子・河内山晶子・森永弘司・浅野亨三・城一道子 (2010) 「大学生の英語学習の意識格差についての研究」『リメディアル教育研究』5(1), pp.9-20.

Wheeler, L.(1966) Motivation as a determinant of upward comparison. *Journal of Experimental Social Psychology, Suppl.1*, pp.27-31.

山口剛 (2012) 「高校生の英単語学習方略使用と認知的・動機づけ要因の関係－有効性の認知の効果に注目したテストの予想得点における個人差の検討」『教育心理学研究』60(4), pp.380-391.

#### 付録1 TOEICスコアのスライド



付録2 質問紙に使用された項目

- 101 中学のとき、英語の授業は楽しかった
- 102 中学のとき、英語が得意だった
- 103 中学のとき、英語が好きだった
- 104 高校のとき、英語の授業は楽しかった
- 105 高校のとき、英語が得意だった
- 106 高校のとき、英語が好きだった
- 107 これからの時代、英語ができたほうがよい
- 108 英語がわからないとき、まず自分でいろいろ試してから他の学生や先生に質問することになっている
- 109 英語が得意な学生と同じ勉強方法を試してみる
- 110 先生や英語が得意な学生に勉強方法を教わる
- 201 短大のこの英語授業を楽しみにしている
- 202 短大のこの英語授業では多くのことを学びたい
- 203 短大のこの英語授業で将来使えるような英語のスキルを身につけたい
- 204 短大のこの英語授業では、学生同士で学ぶ雰囲気があった方がよい
- 205 短大のこの英語授業は、自分の成長に役立つ
- 206 英語でスピーチができると格好いい
- 207 英語を勉強することは楽しい
- 208 英語を勉強することで、言葉に対する知識や技能を深められる
- 209 英語の勉強方法を自分で工夫することは重要である
- 210 英語の勉強方法を工夫することで、英語力が身につく
- 211 英語で話すとき、間違えても気にならない
- 212 英語で話すとき、満足感を覚える
- 213 英語を勉強すると充実感を抱く
- 214 英語を勉強すると、現在の生活場面で役に立つ
- 215 他の学生よりも自分の英語力が高く評価されてほしい
- 216 他の学生よりも自分の英語力を低く評価されたくない
- 217 同じ範囲の英語の勉強を繰り返すと、いつの間にかそれが身につく

- 218 計画的にコツコツ英語を勉強すれば、いつかその努力の成果が得られる
- 301 英語スピーチのときには、アイコンタクトや姿勢にも気を付けたほうがよい
- 302 英語スピーチのときには、英語のリズムやイントネーションにも気をつけたほうがよい
- 303 2回目のスピーチのほうが英語が上手になっていた
- 304 短大のこの英語授業で他の学生がどのように成長したか知ることは重要である
- 305 2回目のスピーチのほうが自信をもってリラックスしていたように見えた
- 306 TOEICなどの英語資格の取得に意欲がわいた